

美しい道で日本を元気に

「日本風景街道」の制度スタートから6年。各ルート代表らが初めて一堂に会した「風景街道サミット in あさま」が10月の2日間、群馬県嬬恋村などで開かれ、風景街道活性化への新たな出発を誓い合った。

初の全国サミット あさま

新たな出発めざして交流

に参考にするべ

日本風景街道は、景観や自然、歴史や文化などの地域資源を活かし、日本の魅力や美しさの発見・創出をめざし、地域主体で進められている新たな道路空間づくりの取り組みで、現在全国で128ルートが登録されている。

会場の東海大学研修施設に集まったのは、北海道から沖縄までの

風景街道各ルートで活動しているNPOや自治体、関連業界関係者ら約250人。

の復興と経済低迷を打破するため、外国人観光客誘致にも力を入れた「観光立国」政策を国政の柱の一つにしている。地域振興の拠点として急速に普及している道の駅と風景街道との連携強化は、日本全体を元気にする有効な起爆力になるとして、今回のサミット出席者も期待を高めている。

はじめに、風景街道の理念をまとめた国交省「日本風景街道戦略会議」委員で筑波大学大学院の石田東生教授が基調講演。

「美しい日本の風景は、耕作放棄地の増加、人口減や高齢化に伴

まだ国民にあまり認知されていない。全国レベルで関係者が交流を深め課題解決に知恵を出し合い、PRに努めるべきだ」と提案、両県も賛同して、実現した。

わが国では現在、東日本大震災

う地方の歴史・文化の荒廃も加わって危機にあるが、郷土を愛する人々が連携・協働する風景街道の活動によって、魅力がアップし始めている。

風景街道は、米国が1930年代の大恐慌後の対策として国を挙げて推進した『シーニックバイウェイ』にならった政策だが、本家米国では今、多大な観光収益と雇用を確保している。わが国としては大いに参考にするべ

きだ」とアピールした。

続いて、同様に戦略会議委員の横島庄治・元NHKキャスター、矢口正子・「旅の手帖」編集長、松本もとみ・同協議会「おちよんきねっと」代表が加わり、パネルディスカッション。全国各ルートからの報告も交え「観光力」を磨くために地域資源の発掘、人や地域などの連携、情報発信をどう進めるかなど、活発に討議した。

草津町のホテルに移動しての交流会には、大澤正明群馬県知事も駆けつけ「風景街道を新しい看板にした観光振興で日本を再生・創生させよう」とエール。サミット参加者は翌日、浅間・白根・志賀さわやか街道」を3コースに分かれて視察。互いの苦労話なども交わしながら意見交換した。



パネル討議、会場内から報告



パネル討議の様子



各ルートの資料も展示された

イレ清掃など「おちよんき」(でしゃばりを意味する地元方言)をしている。次世代を担う子どもたちに郷土の魅力を知ってもらおうキャベツづくり体験教室も開いている。

主なルート活動報告

■しろ白神の道 秋田県

世界自然遺産白神山地のブナ林、日本三大美林の秋田杉樹林帯、日本最大級の黒松砂防林があり、「木のまち」のよさを感じられるようウッドチップを敷き詰めた散歩道、木柵歩道やベンチ整備などを市民参加で進めている。

■隅岐風待ち海道(島根県)

配流の地、北前船寄港地、牛突きなど独特の歴史・文化に加え、世界ジオパーク登録活動も併せ、火山活動と日本海のつくった自然や化石に触

■萌える北天オロロンルート(北海道)

有名観光地はあまりないと

同サミットで発表された計13ルートの事例紹介、報告から、アイデアを凝らした活動など、一部を紹介する。

■浅間・白根・志賀さわやか街道(群馬、長野県)

キャベツ農家の主婦中心に、農作業の合間に観光道路の植栽、除草、ごみ拾い、ト

てもらうことになっている。昆虫採りの秘訣、マムシ対策など100人の地域情報提供者マップをつくった。

■出羽の古道 六十里越街道(山形県)

湯殿山信仰で長年のつちにできた古道が山中あちこちに残り、1200年の「氣」に打たれる。還暦での「六十の詣で」は自身のリセット・再生を意味し、東日本の精神文化をつくったといわれるので案内板を整備中だ。

■北アルプス大展望・最古の塩の道ルート(新潟、長野県)

糸魚川を起点とする北アルプス越えの塩の道は、地元の方々が再発見し整備したもので、もともとウォーカーが多かったが、世界ジオパーク認定を機にさらに増えてきた。

■悠久の竹内街道(大阪府)

できて来年1400年になる日本最古の道。国道になり消えたところも多いが、郷土史家10人が一念発起し、面影を保存し歴史を語る会を10年間で40回延べ3000人対象に続けてきた。市町村もバックアップしてくれるようになり、育てた若い語り部も増えてきた。

■南いよ風景かいどう(愛媛県)

多様なNPOが参加してい

るので、中心市街地の空き店舗に交流拠点を開設、地道な活動を広く知ってもらうことに力を入れている。130、140年前のすばらしい酒蔵が、後継者もなく維持に苦しんでいるので、写真をポスターにし、いろんな機会にわがルートのPRに使っている。

「ロココ」はロココジュンコさんが手がけ、日本の象徴富士山をモチーフに、歴史や文化が道路を介して未来へ続いていくことを表現した。



全国組織でNPO結成

「日本風景街道」の共通課題を共に考え汗を流し、知恵を絞ろうと関連企業・団体、学識者らが特定非営利活動法人「日本風景街道コミュニティ」を設立した。東京事務局のほか北海道(札幌市)、中部(静岡県島田市)、中国(松江市)、九州(宮崎市)に拠点を設けた全国ネットワーク組織で、法人、個人の正会員・賛助会員計約100人が参加。代表理事には石田東生・筑波大学大学院教授が就任した。

風景街道の取り組みはこれまで、各地域が主体となって活動を進めてきたが、制度発足当初の国交省の戦略会議はもともと、各地の活動が交流・連携し、観光立国政策の柱として国土文化復興の一助となるよう期待していた。

8月に東京都内で開いた設立記念シンポジウムでは、「活動を続ける各地から情報発信、課題の調査研究や研修会、人材育成などに当たる全国的な支援組織を求めめる声が相次ぐようになったため」全国組織としてのNPO結成に踏み切った、と設立趣旨が説明された。

当面は、風景街道の地域情報を国内外へ発信する案内人(コンシェルジュ)の支援、育成に着手することにしており、地域ごとに候補者のリストアップを進めている。

秩父路ルネッサンスを訪ねて



地元商店主と語り合いながらまちなか歩き

人気上昇中のまちなか歩き

風景街道は今後、道の駅との連携強化をめざすとの方針を国土交通省が打ち出したが、ひと足早くそんな連携も具体化させているという「秩父路ルネッサンス」を訪ねた。

秩父連山や長瀨渓谷、中津峡、秩父三十四札所巡りのあるルートといえ、昔から観光地として名高く、中でも「日本三大曳山祭」に数えられる師走の秩父夜祭は数十万の人出で大混雑するほど。

最近では、明治・昭和

初期に建てられ独特な趣きのアンティーク建物群や、商店主グルー

課題は観光産業への転換

に加え、昨年テレビで人気を集めたアニメ、通称「あの花」の舞台になった「聖地」巡りの若者も増えている。

風景街道も集客の苦労はなごころに思えたが、まちなか歩き用の調査や案内冊子づくり、ガイドをしているNPO法人「ちちぶまづくり工房」の市川均代表理事はやはり、簡単な話ではないという。「雑多ともいえる独特な雰囲気



風景街道との連携マップを配布(道の駅「ちちぶ」で)

プラがヒットさせたまちなか歩きイベントを訪ねる「まちなか歩き」

が、産業転換に伴う中心市街地の衰退が目立っています。わがまちを愛する市民グループは今、風景街道をどう魅力的にするかアイデアを競い実験し、反省したり議論したりと必死です」

空き店舗を借りて各種活動の拠点にし、秩父銘仙や雛人形の展示、俳句大会、語り部・ガイド養成などをあれこれ試みているが、道の駅との連携もそうした風景街道活動の一環として具体化した。

ルート内に7つも道の駅があるのに、市町村合併したばかりの事情もあって連携が不十分。

それに気付いた市川さんらが、関東地方整備局と相談して各駅・行政連絡会を開き、それぞれの駅と周辺の見どころなどを盛り込んだ風景街道案内地図「ようこそ秩父の道の駅!!」を作成、今春から各駅で利用客に配布し始めた。

道の駅「ちちぶ」の大島育生支配人は「今年は秩父祭屋台が重要な有形民俗文化財に指定され50周年の行事や、『あの花』ブームなどでまちなか歩きの人が増えています、観光客そのものが落ち込み気味なので、風景街道との連携強化は心強い」と歓迎していた。